

〈わからない〉の先へ ～三崎亜紀『私』 授業改善の視点～

専修大学准教授 すずき えり 鈴木愛理



1. 国語の授業における 物語・小説を「読むこと」

物語や小説を読む楽しさとは、どのようなものでしょうか。その作品を初めて読むときは、ストーリーの展開に駆動されるようにページをめくる（この先どうなるのだろう？ という気持ちから続きを読んでいく）ことが多いでしょう。もちろん、ただストーリーを追いかけるだけではなく、登場人物の心の動きに共感したり、語り手の目を通してほかの登場人物を見つめたりする経験を通して、作品世界に浸ることも楽しみの一つです。

しかし読書が好きな人でも、全ての物語や小説をそのように読めるわけではありません。好きな作品や作家があれば、苦手な文体や嫌いな作品もあるでしょう。ときには、読むことを途中でやめてしまうかもしれません。

では、おもしろくない作品は読めなくていいものでしょうか。もちろん、嫌いなものをあえて読む必要はないかもしれませんが、読書は強要されるものではありません。ただ、〈読めていない可能性について考えてみる〉ことから始まる学びはあります。単に好みの問題として片づけずに、その作品のどのようなところが評価されているのか、またどのような読み方をすればそうした楽しみにたどり着くことができるのか、それを考えて楽しむことも国語の授業だと考えます（なぜなら、そうすることで読む力がつくからです）。つまらないのはわからないからかもしれない、何がわからないのだろう、どうしたらわかるのだろう、と考えるところに学ぶよろこびがあります。一度読むだけでは、一人で読むだけでは、なかなかおもしろさに手が届かない作品こそ、教材としてはおもしろいともいえます。

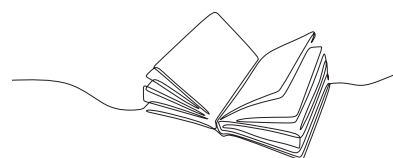
2. 教材としての三崎亜紀『私』

三崎亜紀『私』は、平成 28（2016）年から教科書に掲載されている教材です。作品の初出は『小説すばる』（集英社、2011 年 12 月号）で、「小説すばる新人賞受賞作家特集」のなかで取り上げられています。またその後、日本文藝家協会編『短篇ベストコレクション 現代の小説 2012』（徳間書店、2012 年 6 月）に所収されるなど、現代文学（同時代文学）として一定の評価を得た作品と考えてよいでしょう。

しかし、中学 3 年生の読者にとっては少し距離を感じる作品でもあるようです。中心人物が同年代ではなく社会人であること、どの登場人物にも感情移入しにくいこと、感動的な展開がないこと、テーマがよくわからないことなど、どう受け止めてよいのかわからないという戸惑いがみられます。それは、これまで読んできた文学作品とは何かが違う、と感じているからこそその反応でもあります。

また教える側からも、解釈や授業づくりが難しい、教えづらいとの声が寄せられているようです。

一見、日常生活を描いているようでありながら、現実にはありえない事態に出くわすという不条理な内容が、読者を困惑させ、わかりやすい共感や感動を得にくくしているのかもしれませんが（高校の教材としてよく読まれる安部公房に近い印象です）。理屈を重ねるように話が展開されるため、その理解に消耗してしまい、作品のしかけを捉えにくいということもあるでしょう。先に述べたように、生徒にとって作品の舞台や状況が想像しにくいものであることも、教えづらさにつながっているといえます。



3. 「学びナビ」の活用

それでは、この教材を読む手がかり、この作品を読んだときに覚える違和感や奇妙なずれを楽しむ方法はないのでしょうか。

その一つの答えとして、「学びナビ」があります。『私』の「学びナビ」では、「記号」について取り上げられていますが、内容を簡単にまとめると、下記ようになります。

- 記号＝ある決まった意味を表すもの
- 象徴との違い
記号…記号と、記号によって示されるものとの関係は、イコール。
象徴…象徴するものと象徴されるものを置きかえることはできない。

そして、「記号」をキーワードに『私』を読んで

いく際のポイントが、「学びナビ」2 ページめ下段に「ヒント」としてまとめられています。

- 作品の中で、記号とみなされているものはないか、探しながら読んでみよう。
- 登場人物それぞれの見方や考え方の違いを捉えながら読んでみよう。

ストーリーの展開を追ったり、登場人物に感情移入したりして読むだけでなく、作品の中で「記号」（＝ある決まった意味を表すもの）の役割を果たしているものは何かという点に着目することで、「ある決まった意味」とは何か、それは登場人物によってどう違うのか、登場人物の見方や考え方とどう関わっているのか、という読みにつなげていくことができます。

私

連想させる具体的な事物に代表させて表すことです。例えば、「鳩」は「平和」の象徴として知られています。形のないものを形あるもので表現することにより、イメージが伝わりやすくなります。

しかし、象徴するものと象徴されるものを置きかえることはできません。「鳩」と「平和」の場合、「鳩」は「平和」を象徴するもの、「平和」は「鳩」に象徴されるものですが、「平和」が「鳩」を象徴するものにはなりません。つまり、象徴の場合、象徴するもの（鳩）から象徴されるもの（平和）への矢印は、一方のみが可能で、逆の方向は成り立たないのです。

記号の場合はどうでしょう。記号と、記号によって示されるものは、同じ意味をもつていなければ機能しません。例えば、「〒」の記号の意味が常に「郵便」でなければ、記号として使えません。このように、記号と、記号によって示されるものとの関係は、イコールになります。

『私』では、ある人物の存在を証明するものとして、「免許証」「保険証」「パスポート」「住民番号」「住民データ」などといった「個人情報」が示されています。「情報」によってある個人が特定され、その人が存在するということが保証されるのです。では、その「情報」が二重になったり、失われたりした場合、「私」の存在も二重になったり、消えてしまったりするのでしょうか。現実には、そのようなことはありません。しかし、「私」が「私」であることを「情報」以外によって証明することは難しくもあります。「個人情報」は「私」の存在を表す記号といえるのか、考えてみましょう。

● 作品の中で、記号とみなされているものはないか、探しながら読んでみよう。

● 登場人物それぞれの見方や考え方の違いを捉えながら読んでみよう。



わたし
私

学びナビ

記号

「お辞儀」も記号？

記号とは、ある決まった意味を表すものです。例えば、「〒」は「郵便」を表す記号です。記号には動作なども含まれます。例えば、「お辞儀」は感謝や謝罪を表す記号ともいえます。誰かに頭を下げられたときに、言葉がなくても「ありがたう」や「ごめんなさい」という気持ちの表現として受け取ることができるのは、「お辞儀」をそうした記号として理解しているからです。文字や音符、信号の色（青は進め、赤は止まれ）、道路標識、地図記号、ピクトグラム、ハンドサインも記号です。決まった記号を使うことで、決まった意味を効率的に伝えることができます。

しかし、これらの記号がどうした意味を表さない社会もあります。記号とは、ある社会や文化の中で、なんらかの拘束力をもつ約束ごとなのです。

記号と象徴

ここで、記号を象徴と比べてみましょう。象徴は、抽象的な物事を、それを

平和

鳩＝平和

「鳩」は「平和」の象徴。
「平和」は「鳩」の象徴ではない。

郵便

〒＝郵便

「〒」は常に「郵便」を意味する。

文庫の種類／立っている者／なぜ物語が必要なのか

私という視点／故郷

目標

- 読書が自分の生き方や社会との関わり方を支えていることを理解する。
- 作品を読んで人間や社会などについて考えを巡らせ、自分の意見をもつ。

4. 〈わからない〉を生かす読み

このように、「学びナビ」を使った導入や「ヒント」は『私』を読んでいく手助けとなります。ほかにも、生徒が登場人物たちの経験を自分自身の経験（読書で得た経験も含む）と関連づけるという読み方も、自分自身の経験を使って登場人物たちをよりよく理解するという方略を学ぶことにつながります。

例えば、「シュレッターで無数の『個人情報』を裁断しながら」（新版教科書 P41L8）の箇所です。1年時の『少年の日の思い出』の結末（チョウチョを指で粉々に押し潰すシーン）を思い出す人、「女性」の「経験していない人には、わからないでしょうね。」（P38L14）という言葉からうまく伝えられなくて困った経験を思い出す人、「私」と同じように相手の言っていることは理解できないけれども相手が満足してくれればいいかと適当に相槌^{あいづち}を打ちながら話を聞いたことを思い出す人、「司書」のような対応はちょっと違うのではないかなと思う人（何が違うのかはわからないけれど）、「私」の同期の「山中」くらいしか友達になれそうにないなと思う（主要登場人物たちは、どの人も極端な気がする）人がいるかもしれません。

生徒の（場合によっては教える側の）〈わからない〉ということも含めた素直な感想を大切にすることが、この作品を読んでいく大切な手がかりとなるのです。

冒頭の数行を読み、読者は「私」に対し、几帳面、まじめ、計画的、仕事熱心などといった人物像を想像するでしょう。10行ほど読み進めると、自信家でもあることがわかります（P34L10「経験によって導き出された絶妙な時間差だ。」、P35L7「対応に抜かりはない。」など）。さらに読み進めれば、会話文には「謝意」が感じられるものの、そこには少しも「謝意」がないことがわかります（P35L10「言葉には最大限の謝意を込め、心中にはさざ波すら立てず」など）。「私」の「市民対応」は表面的には「模範的」ですが、実際には相手の心に寄り添うことのない、さめたものです。一見、〈お役所仕事〉（形式重視で不親切、親身になってくれず、非能率的な仕事ぶりを非難する語）には見えませんが、結局は「過去の市民対応の積み重ねから、相手のタイプを推し量る。」（P36L17）など〈マニュアル的な対応〉（あ

らかじめ決められている形式どおりの対応）をしているにすぎない、ビジネスライク（仕事と割り切って能率的にするさま。よくいえば、合理的でプロフェSSIONナル）な人物です。その背景には、かたちだけの「誠意」や「解決」であることが相手にばれることはないという考え（自信、余裕、見下し）があるでしょう。

冷静な「私」が、「女性」の主張や要求に対して「当惑」し（前半）、「司書」に対して（P43L18「本を借りることに執着しているわけではない。」にもかかわらず）貸出を強要する（後半）など、予想外のことに感情を動かされてしまうところがこの作品のおもしろい部分であり、大切な部分ではないでしょうか。前半の最後、「シュレッターで無数の『個人情報』を裁断しながら、私はつい、そんな想像をしてしまった。」（P41L8）という言葉からも、思わず現実的にありえないことを考えてしまっている、いつもとは違う「私」の姿が読み取れます。

後半で「司書」の説明を受けた際の返答、「なるほど……。」（P43L7）はどうでしょう。心から納得しているなら「……」はいるのでしょうか。説明を理解できない無能な人間だとは思われたくないから「なるほど」と言ったものの、どうしたものかと思案しているのかもしれません。続く「私は、ようやく合点がいった。」という言葉も、「司書」の見方・考え方を了解したという意味であり、「司書」の説明どおり、「私」自身が二重になったと考えているわけではないでしょう（だからこそ、「納得できません。」

〔P43L16〕とすることができます）。前半の「女性」への対応からもわかるように、「私」は相手の見方・考え方に合わせることで相手を動かしています。後半の場合、「司書」の見方・考え方に従って意見しなければ「無理難題タイプ」か「論理矛盾タイプ」と見なされてしまうので、「司書」の言うように仮に存在が「二重」になっているとしても「私」の知らない「私」は「私」と同一ではない（解消すべき問題だ）と主張するわけです。「私」の性格やここまでの文脈を踏まえると、後半の最後、「どちらが消えようが、同じ『私』なのだ。何の問題もない。」という言葉も、本当の「私」は消えるわけがない（消せるのはデータだけだ）と考えているからこそその言葉で

しょう。しかしこうした事態は「何の問題もない」と言えるものなのか、読者には疑問が残ります。

現実 is 想定内のものだと考えて暮らす「私」の日常に、それぞれの角度から風穴を開けるのが「女性」と「司書」です。「私」と「司書」の市民対応を比較したり、「女性」や「私」はそれぞれ何を問題にしているのかを整理したりすることは、それぞれの風穴から見える世界を知ることにつながります。

「読むこと」の授業では、何時間もかけて一つの作品を読みます。学習の手引きとして示される問いに取り組む際にも〈虚構作品をくぐる〉という読書経験の成立を大切にしたいものです。〈わからない〉と

いう感覚に向き合うことは、学習の手引きに取り組む足場づくりになるでしょう。



5. 文学の役割

物語や小説を読むとき、私たちは何を期待しているのでしょうか。おもしろいと思う作品に共通することを考えてみてください。おそらく、共感や感動、ときには教えや学びを期待して、またその前提として〈わかる〉ということを経験して、読み始めるのだと思います。逆に言えば、登場人物に共感できない、結末に感動できないのは、〈わからない〉からです。しかし〈わからない〉という要素こそが文学を文学たらしめているとも言われています。

いろいろなことが〈わからない〉まま宙づりにされる感覚を楽しもうという姿勢を読者がもてるかどうかは、文学として読めるかどうかに関わりそうです。三崎亜記『私』も、「このあとどうなるんだろう……」という不安な空気を残して終わりますし、中心人物の「私」は問題解決能力が高く有能な人物でありながら、なんとなく親近感を覚えにくい人物でもあります。それを〈わからない〉あるいは〈つまらない〉と切り捨てない（「私」を見捨てる）ところに文学が生まれるのではないでしょう

か。共感とは、シンパシー（sympathy、親近感をもつ、思いを一つにする、感覚的な感情移入）だけではありません。また同情（compassion、下の立場への哀れみ、思いやり）とも違います。能動的な営みとして、エンパシー（empathy、感情を共有することなくその気持ちを洞察する知的活動、認知的な感情移入）を試みるのが、文学のレッスンとしては大切だと考えます。

文学は〈わからない〉という方法で、私たちを現実から引き離すのではなく、見逃しているものに向き合わせる役割があります。三崎亜記『私』に描かれるできごとは現実離れしているようにみえますが、あえてそういう方法をとっているのだと考え、読みを広げ、深めていく過程に学びがあるのです。

【参考文献】

- ・斎藤美奈子『日本の同時代小説』岩波新書、2018
- ・鴻巣友季子『文学は予言する』新潮選書、2022